

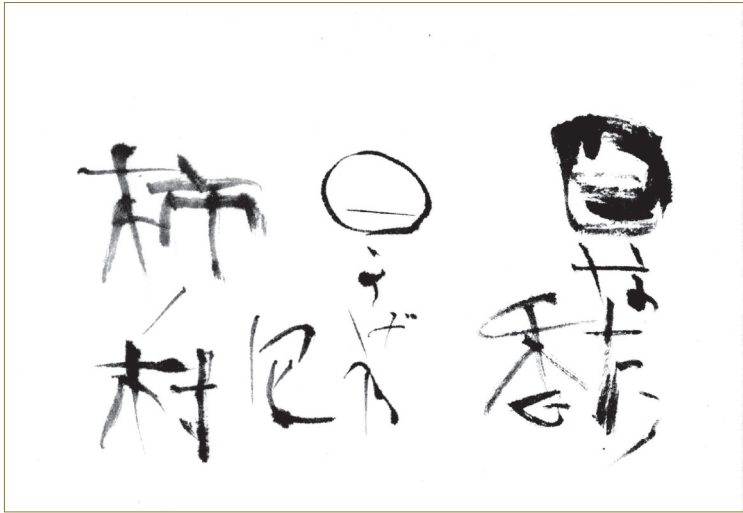
# あを 9

2025



撮影：不寝

青  
蚓  
龜  
蛇



日向の香日陰のにほひ柿の村  
竹僊

九月集

坐・誹

佐藤 竹僊

初蟬やパスが去つたらもうゐない

蟻の道みなすこやかな者ばかり

炎天につんと徒長枝絲ざくら

どうもかうも合はぬ某國ところてん

小窓からすぐゐなくなり夏の月

野を這うて紺朝顔の咲きすすむ

春の雨舊假名づかひの字幕かな

春や春自轉車に乗る原節子

さくらから紫木蓮までブランコで



影法師

篠田大佳

行く夏やカフェに小さき同窓会  
夏競馬破滅の預言当たるなら  
私はね暑いけれども夏が好き  
炎昼やカウチはジャズの変拍子  
アイスティー毒吐いてより笑まひけり  
夕涼やかな鈴と影法師  
港に買ふ多摩の冷酒のワンカップ  
汽笛一声月なき夏の常夜灯  
夕涼しフィルムに写す旅の果



雑詠

須賀敏子

今日も又ゴジラのような暑さかな  
梅雨晴間大事な物は手で洗ふ  
アイロンの最後ハンカチ五枚ほど  
茄子胡瓜四つ足付けて曲がり角  
ファン付きのベスト息子のハンガーに  
夕涼み兼ねて返却本を持つ  
島へ行く船に並びて飛び魚よ





稲

長崎桂子

鉄線花そだてて住まひ引立てる  
朝日いで今日をはじめの幸運に  
今日ひとひ自分勝手な夏書して  
畦道の名を知らぬ草の花かはい  
山並つらね水ゆたか稲げんき  
離農して安けくなりし友の夏  
点滴しひとひ救はるる梅雨さ中  
次次おそふ雨雲や強い七月  
元氣かいつもの位置に守宮くる  
梅雨明や庭の草丈倍になり



暑き朝

森なほ子

爆撃のトップニュースや暑き朝  
白シャツや背丈伸び出す前の子等  
容赦なくドア開きけり冷房車  
右手に日傘左手にタオル入りバック  
汗拭ひペットボトルもふいてやる  
温泉の銭湯代はり避暑の町  
昔よりちよつと暑いと生身魂  
木々の香の濃くなつてゐる夕立雲



走馬灯

赤座典子

色筆ペン梅酒のラベルとりどりに  
婿殿と同じ銘柄缶ビール  
身勝手な咆哮止まず夏芝居  
炎熱やまさかの坂のまた一つ  
夜濯や気の紛れしと独りごつ  
見舞ひ終ふバス停で浴ぶ蟬時雨  
四週後夫退院の谷崎忌  
逝きし義妹戻りし夫や走馬灯



浮遊する

秋川泉

坂道の住まひ新たに夏至に入る  
涼しさやこのままが良い今日の幸  
夕闇やノンアルコールまず一献  
朝顔の浮遊する花宙に咲く  
振花の上へ上へと目の動く  
時止まり昼に咲ききる蓮の花  
もくもくと雲の湧き出る夏野原  
自転車で追ひ追ひかけて遠花火  
回転するめまひ遠く蟬の声



帰還

七郎衛門吉保

ナースセンターお洒落ですねと夏草履  
根比べ九時消灯の熱帯夜  
粥飯と点滴が友夏休み  
信頼の病窓にあり夏鳥  
病室に蜘蛛歩き出し底ひけり  
看護師のいかがですかや路地西瓜  
病床に聴こゆ励みの盆踊  
病臥より見上ぐ夏空無限大  
「退院です」に夏の朝早く明け  
小鳥待つ夏の館に帰還兵



地曳き網

篠田純子

朝富士や岩井の浜に地曳引く  
漁師より勤労対価の鰯二ひき  
吾曳きし鰯のたたきぞ喉に甘し  
露國より夏に津波来二十糎  
みんなや勤務是正をせし朝に  
馬冷やせそれ牛冷やせ鶏冷やせ



自轉車で他人の花見を見て通る

佐藤竹僊

「お花見」の形にも、大きなシートを持ち込んで、宴会を開く、出店の軽食も楽しむ、沿岸に腰かけて、桜を満喫する等々、様々あります。作者は、そんな様々な光景を見ながら過ぎていきます。これも立派な「お花見」ですね。(典子)

違ふ木が櫻並木に立つてゐる

佐藤竹僊

「違ふ木」というのは、桜の木ではない木で、名前も呼ばれない木なのでしょう。この木に名前をつけてやりたい気もしますが、名前を呼ばれないからこそ、疎外感をより強く感じます。この仲間外れの木は、みんな同じがいいという圧力に挫折屈折を感じながら、みんなとは違う方向を向いたからこそ、得られる花時があるのだと思います。(大佳)

妹逝くや麦飯育ちの背比べ

七郎衛門吉保

作者は、戦後の物資のない時代に食べ盛りの少年期を過ごしたと読みます。栄養状態のよくない中でも、決して暗い気持ちにならずに、希望を失わずに、遊び、食べ、学んで、妹さんとも背比べ

をして、競って体を大きくしていたのを想像します。作者の妹さんにお悔やみ申し上げます。(大佳)



米飯に麦が入ると麦の茶色の線が目立つ。麦が入ってゐることがすぐ判明。現今は麦を、コレステロール低下、血糖値上昇抑制、満腹感による食べ過ぎ防止で肥満や生活習慣病の予防に役立つ等々で積極的に食べる時代。戦後は増量が目的で麦を食べた。「米粒麦」などを作り苦労して食べた。このことを体験した者は抜けがたい麦への思ひがある。妹を幼少時を麦飯を通じて偲ぶんでえられる。妻は吉保さんと同年代。異常に麦飯を嫌った。

掲句、戦後の食糧難と一緒に越えてきた妹さん。戦友に近いと云へば云へるかも。柱の傷もおとしのと懐かしく思ひだすことだ。私をふくめ兄弟は四人ゐた。柱の傷もにぎやかであつた。(喜孝)

鯉のぼり一尾秋刀魚ぞ東京タワー

篠田純子

先の「あを」5月号の表紙の鯉のぼりは、あとがきの解説によれば、東京タワーの高さと同じ、333匹もあり、そのなかのいっぴきは、「秋刀魚のぼり」とのことです。本来の鯉に劣らず、背筋を伸ばして、立派に泳いでいます。作者はこの句に「秋刀魚ぞー」と名乗らせています。この「ぞ」については、純子さんにしか出来ない使い方と、常々感心しています。秋刀魚の凛々しさと、東北への、復興支援の心意気が伝わってくる句です。(典子)



轢死せしとんぼの骸剥しける

篠田純子

油虫、蟬、蚯蚓、墓蛙などの骸が町の路上でよく見かける。無惨にも何度も車輪が上を通ったのか紙のやうになつてゐる。純子さんはそれを見過ごさない。ここがこの句の眼目。「剥す」といふリアリティとその行為が表はす作者の心情を味はつた。(喜孝)

夏もまだ夏に慣れずや夏の雨

篠田大佳

産調出版の『読本・俳句歳時記』には、「五月雨、梅雨、雷雨、夕立など、特色を表現した雨ではなく、普通の雨を「夏の雨」という」とあります。作者が、まだ夏と実感できない状況を、夏自体も、夏に慣れていないのではと、詠まれたのでしょうか。この季節の、雨を詠まれて、とてもいい句なのに、鑑賞が追いつきませんでした。(典子)

薫風やアドレセンスは言ひ切れり

篠田大佳

「秋収集」に収めた一句。『アドレセンス』はNetflixの話題作の題名でもある。私は未見。言語としては「adulthood」は、思春期や青春期を意味する英単語であるさうだ。掲句は『がないからドラマの題名ではなく英単語としての「アドレセンス」であらう。さう読み青春時の決断力の潔さをおもつた。しかしこの句の「アドレセンス」とNetflixの『アドレセンス』が無関係であ

るはずがない。(喜孝)

梅雨晴れ間低山歩く一日かな

須賀敏子

百名山を踏破された敏子さん。素晴らしい財産をお持ちです。そして今も、登山を続けておられるのも、本当に見事です。テレビ画面で、訪れた場所を懐かしんでいる身としては、羨ましい限りです。身の丈に合わせた山登りを、いつまでも楽しんでください。(典子)



壮健なころなら高尾山などは本格登山への訓練、足慣らしといふところだ。が今はさうとは云へなくなつた。それでも山歩きの楽しみを捨てることはない。典子さんと同じく「羨ましい限り」である。(喜孝)

みどりの日うつそうとした道ここちよき

長崎桂子

みどりの日は、今は五月四日になつて、初夏の気候を表すようになったのですね。少し暑くなつてきた陽気でみどりの日とくれば、庭の木か街路樹の下でしょうか、木陰の涼しさがありがたく感じられます。ひらがなの多さとたつぷりと語られた語り口に、木陰の心地よさをさらに感じます。(大佳)

白牡丹といへど仄と紅ニヶ所

長崎桂子

人口に膾炙した虚子の俳句「白牡丹といふといへども紅ほのか」がある。俳句の格はさすがに及ばない。しかし掲句は掲句の存在感はある。桂子さんは作品を昇華せんとすることより、己の目で見たことを書き留めたい、といふ希ひが強い。このおもひは近作全般にわたつてゐる。(喜孝)

#### 子育ての乙鳥は人を見てをらず

森なほ子

子育て中の燕は、本当に忙しそうです。子のための餌をくわえて、一目散に巣を目指します。お腹を空かせた子燕たちは、皆大きな口を開けたまま待っています。ひたすら飛んでいる親燕には、観察している人間など目に入りません。親としての一生懸命さに心を打たれます。景がしっかりと詠まれていて、流石です。(典子)

AIで日本人社会と燕はいつごろから共存するやうになったかと尋ねた。「正確な年代は記録されていませんが、少なくとも江戸時代以前からツバメは人の近くで営巣していたと考えられています。日本では古くから「ツバメが巣を作る家は繁栄する」といった言い伝えがあり、民間信仰の中にも登場しています。」と。ヨーロッパ、アメリカでは人間との距離感があるそうです。中東、アフリカでは洞窟などの自然を利用して巣を作るとか。掲句を読むと日本に來た燕は安心して子育てに専心してくれてゐるやうです。(喜孝)

#### 人住みて燕すみなす深山かな

加舎白雄

#### そうかももう貴方はいない夏つばめ

赤座典子

夏つばめのイメージをまず考えていきます。春に飛來したつばめは、夏になると各地に腰を落ち着けています。自在に飛來しているという例句が多く、命を広げているというイメージです。一方で、作中で明かされていない誰かと何かを共感したいが、話を聞かせたい人はそこにはいないと読みました。

作者は、鑑賞文の担当になって、任を全うできるか悩んでおられました。何か、手応えを感じられた時に、鎌倉喜久恵さんのことを書かれていたと思います。「あを」の動静は創刊以来耳には入っていたので、喜久恵さんの訃報も突然だった印象があります。作者は呼びかける相手の名前を出していませんが、なんとなく、熱の入った五月号掲載の鑑賞のことを思い出しました。(大佳)

この句のやうに口語も表現方法のひとつ。「さうかもうあなたはゐない夏つばめ」と比べると同じ内容なのだが句の表情が少し違ふやうだ。夏つばめに触発されて思ひ出される人。「さうかもう」と現実をうべなはなければならぬおもひを込めて詠まれた。(喜孝)

#### 無花果が出たよさうかもう居ないのか

辻美奈子

## 秋収集

青竜の腹の生白梅雨あがる  
蓮の風ほしいまま浴ぶ朝の池  
透し見る蓮の葉脈手の血筋  
鯉の稚魚かたまり泳ぐ蓮の池  
梅雨の傘忘れしままに置いてあり  
メロンソーダ悪口あかんもう聞いたで  
夏やカフェ赤子叫ぶもジャズの内  
今日の空山紫陽花の花の色  
蜜豆を前に静かな二人かな  
脇道にびつしりきれい虞美人草  
高原は香りみちみちカミモール  
青梅の一粒地面明るうす

佐藤 竹僊

篠田 純子

篠田 大佳

須賀 敏子

長崎 桂子

森なほ子

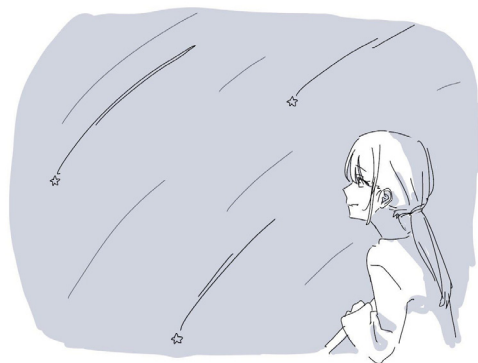


葉桜や媼出歩く時間帯  
乗り換への束の間京の夏匂ふ  
学童の帰路賑やかや枇杷小粒  
梅雨ですね話題見つかる美容院  
一人居の時の記念日ちぎれ雲  
リモコンに遊ぶ文鳥羽抜鳥  
新じゃがや根気で仕上ぐ煮転がし  
賑やかな妹を送るや金銀花  
賑やかに妹を送るや金銀花  
早苗田に元気な水路歓喜あり  
古古古米植田のとなり休耕田

赤座 典子

七郎衛門吉保

喜孝抄





## 夏の着物 その三 木綿単衣 七郎衛門吉保

盛夏の中、日本の伝統工芸の技と美を公募で競う「日本伝統工芸展」の第七十三回が開催されている。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の七部門で構成され、本文テーマの着物は染織部門になる伝統的な型染め技法の一つに長板中型がある。約6.5mの長さの板に生地を張り付け、生地の両面に糊を置いて藍染めをする、表裏とも同じ柄が鮮明に現れ、藍と白のコントラストが際立った染になる。染め柄の大きさが小紋と大紋の中間サイズなので中型と云われている。

この染め技法で第三十三回以降ほぼ毎年のように工芸展に挑戦し続けている染織作家、松原伸生氏と知己を得ることができた。氏の着物を着られた縁である

中厚手の木綿地に、藍の四角辺と丸型白抜きとの連続模様は、アラビア風の中に日本の粹を見て取れる。小じやれた単衣となり、数年後に購入した帯との組み合わせはお気に入りの着物セットとなっている。

作者は二〇一四年の同展において長板中型着尺「漣

文」が当時の最高栄誉であった高松宮記念賞を受賞した。さらに二〇二三年には無形文化財保持者に認定された。人間国宝作の着物を着るこそばゆさがあるが 他方で密やかな喜びを噛み締めたりもしている。

『あを』二〇一八年九月号に掲載した。この着尺に合わせて選んだ久保田万太郎の句は

水中花咲かせしまひし淋しさよ



## 流れつくれば嬉々と逆らふ鉢目高

佐藤喜孝

庭には使はなくなつたブリキ製の衣装ケースでビオトープのまねごとをしてゐる。雨水がすぐ溜まつた。雨水が貯まると蚊の心配が生じた。近くの店で一番安い鉢目高をあるだけ（十匹ぐらい）買つて放した。少し寂しいかなとネットで高級な目高を買つた。この目高たちは数日のうちに全滅した。鉢目高は元気に冬を越したが、雨の日の増水を期に逃げ出してしまひ今は三四匹。いつの間にかやらヤゴが棲みつき蜻蛉になつてくれたりした。生まれた糸蜻蛉は長くこの水場を離れない。孵化した数ミリの目高の子を見つけた時はうれしかった。親に食べられるらしいので網でひたすら掬つて別の容器に移した。今は大きくなり親と一緒に泳いでゐる。数十匹ほどの目高に餌をやるのが仕事になつた。

と、目高の句を作つて楽しんでゐた先日、あつ、さうだと掲句を思ひ出した。十代のころ朝日俳壇に投句した一句である。中村草田男選に入り嬉々としたことを思ひ出した。景品に葉書が送られてきた。その葉書でせつせと投句したが以後は梨の礫。葉書が切れたので投句もやめてしまつた。中村草田男が選をしてゐたときは山口誓子・星野立子・加藤楸邨と共に選であつた。この句は覚えてゐるのだが目高を飼つてゐた記憶はスッポリ抜けてゐる。

## 季語あれこれ 「二十四節季・ほか」

二十四節季は中国から伝はった季節の区切りの言葉。

中国で世界遺産として登録してゐる。「立秋」は新暦で八月八日ごろ。暑い盛りの立秋に？。

立秋にフェーン現象めすわりて

赤座 典子

立秋のくるくる回るカバの耳

佐藤 竹僊

立秋や暦と違ふひと日過ぎ

芝宮須磨子

立秋の前髪さらり風に揺れ

大日向幸江

立秋や三毛も何だかこざっぱり

秋川 泉

「立秋」を「秋立つ」と大和言葉にかへた。使用頻度が高い。

秋立つや竹の切口水ためて

渡邊 友七

図書館とプールへ行きし秋立つ日

赤座 典子

秋立や浅間の煙うすうすと

森山のりこ

床屋さん剃りつついふよ秋立てる

定梶じょう

秋立つや今宵も二合米を研ぐ

斉藤 裕子

名ばかりとなりし暦の秋立つ日

木村茂登子

秋立つや優先順位見えてきた  
埒もなし暦の上の秋立つ日

飛脚行く馬籠秋立つ石畳

秋立つと天帝隕石飛ばしけり

名は風雅秋立つ朝に生まれけり

「処暑」は新暦八月二十三日頃。

スターティングメンバー告ぐる処暑の声

篠田 純子

朝顔の開いてをりぬ処暑の午後

赤座 典子

処暑となり切りのつきたる旅支度

赤座 典子

みんなのきちり処暑より鳴かぬなり

篠田 純子

「白露」は九月七日ごろ。データベースから抽出するのに「しらつゆ」があるので手間がかかる。

走り根のまた土に入る白露の日

佐藤 竹僊

二枚舌つかひまはして白露過ぐ

佐藤 恭子

遺言書書けば書いたで白露かな

佐藤 恭子

水茎の清清「金風白露秋」

東 亜 未

蚊蜻蛉のごとき手と足白露の日

篠田 純子

傷口は妙な味する白露の日

篠田 純子

吉田拓郎も初転筋の白露かな

赤座 典子

二の腕が白露の今を告げてゐる

篠田 大佳

「寒露」は十月八日ごろ

登らんと梯子を仰ぐけふ寒露

定梶じょう

「霜降」(十月二十三日ごろ)の俳句はなかった。



題詠で「九月」と出されたら作りにくいなあと思ふ。

江戸期の歳時記には三月尽と九月尽以外はない。

切抜きの多し九月の新聞紙

早崎 泰江

きのふより高し九月の富士の山

佐藤 竹僊

いつからの心の錆や九月尽

関口 ゆき

換気扇新しくして九月尽

須賀 敏子

毎日の風が左右し九月終ゆ

堀内 一郎

斉藤 裕子

木村茂登子

竹内 弘子

竹内 弘子

大日向幸江

九月二日飯田蝶子の涙かな

堀内 一郎

夫の写真九月の壁に笑つてゐる

芝 尚子

誕生日音なく過ぎし九月かな

早崎 泰江

手をとって歩むことなく九月尽

須賀 敏子

夫の写真九月の壁に笑つてゐる

芝 尚子

ロボットと交す言葉よ九月尽

森山のりこ

白神の九月のしじみ櫃は緑濃く

須賀 敏子

富士九月バス一台の重さかな

堀内 一郎

九月くる粥一膳の力かな

篠田 純子

大亀のゆつくり沈む九月かな

吉成美代子

何もせぬ間に九月逃げてゆき

鎌倉喜久恵

級友の変はらぬ笑顔九月尽

須賀 敏子

穏やかに夫古稀迎ふ九月かな

須賀 敏子

重たさう九月脚長蜂の脚

定梶じょう

苦瓜の成り続けたたり九月尽

須賀 敏子

人の死を悼みつ九月盡惜しむ

定梶じょう

七十億の一人で在りし九月尽

須賀 敏子

高校の始業放送九月かな

大日向幸江



決勝戦術無く終り九月尽

イ・キ・オ・イーと黄色い叫び九月場所

ひと知れず祈りの行者九月尽

先見えぬ踏絵の連鎖九月果つ

「ひよっこ」に自分史重ね九月尽

大病を生きぬいてゆく九月尽

九月来る早三回忌トモ子さん

建売りに未だ万国旗九月尽

九月一日小まめに洗ふ皿ちゃわん

画布伸べて夫は九月で傘寿なり

コロナ禍も峠を越して九月尽

九月尽解除解任解散と

震源は能登半島や九月の夕

九月にも真夏日続くこの頃変

寂寥のただよふ庭や九月尽

若人の自撮りの笑顔九月尽

否定形にしたき季語ある九月かな

「葉月」は陰暦八月。

赤座 典子

篠田 純子

秋川 泉

赤座 典子

七郎衛門吉保

秋川 泉

須賀 敏子

赤座 典子

篠田 純子

須賀 敏子

須賀 敏子

七郎衛門吉保

長崎 桂子

須賀 敏子

秋川 泉

都築 繁子

七郎衛門吉保

ねむる間に葉月の過ぎる真夜の月

陰ふかく心地よき道葉月かな

揉んでゐて水匂ひだす葉月かな

宵の風背筋ひやりの葉月かな

「八朔」は旧暦八月一日。田の実節句。早稲の穂が実

る時期にあたり、農民が初穂を恩人や親しい人に贈る風

習があつた。「田の実」を「頼み」にかけて、感謝の気

持ちを表す日とされた。

今もなほ八朔ばたもち配り来る。

八朔を信濃にありて風つかむ。

八朔にざわつと風のたつもよし。

八朔や阿久悠硬派全うす。

「重陽」の節句。中国の風習、日本では奈良時代より

観菊の宴が行われた。

花手水敷き重陽の大神宮

秋は食欲の秋ともいはれる。食べ物飲み物の俳句を

濁酒酒井田柿右衛門の青

岩室に濁酒を封じ漆搔

渡邊 友七

長崎 桂子

佐藤 竹僊

長崎 桂子

関口 ゆき

鎌倉喜久恵

鎌倉喜久恵

赤座 典子

篠田 大佳

佐藤 恭子

竹内 弘子

ふくろふのとぼけ眼や濁酒

濁酒しろふくらふのかほになる

壱岐の鯛まづは酒盗に濁酒

年酒とて「どんべり」といふ濁酒

熒惑を指で挟む濁酒

新島のくさやに濁酒酌まんかな

場外に新酒売らるる築地河岸

モツアルトの調べ流せる新酒蔵

したり顔の人ひとひとや新酒会

新酒酌む無敗牝馬の秋華賞

新酒持ち友来る二日化粧せず

白雪夜ひとりが上上古酒を酌む

土室にひんやりと古酒置いてあり

新酒古酒夫の秘蔵は蜂焼酎

ふるさとの正月静か古酒の酔

寡黙なる縁戚に古酒携へて

まして酒一瞬奈落へ竦む夢

女性陣結構お酒の句があったの嬉しい。

佐藤 恭子

佐藤 喜孝

赤座 典子

赤座 典子

佐藤 恭子

竹内 弘子

赤座 典子

森山のりこ

大日向幸江

秋川 泉

大日向幸江

佐藤 恭子

竹内 弘子

東 亜 未

遠藤 実

赤座 典子

森 理和

往生に小もよからむ菊脰

親不知抜かれてしまひ菊脰

蒲焼に添ふ菊脰一つまみ

菜箸を巧みに使ひ菊脰

「もつてのほか」うすくれなゐの菊脰

菊脰二輪小鉢へ浮かせ置く

佐藤 喜孝

森 理和

赤座 典子

芝宮須磨子

赤座 典子

森 理和



同窓会新そばを説く友の居り

新蕎麦がへぎに並びし匂ひたつ

新蕎麦に一箸一点山葵添え

新蕎麦や口腔で息吹き返す

くらがりに髭長だるま新蕎麦待つ

新蕎麦やガラス戸の外椿象這ふ

新蕎麦と熱き蕎麦湯に能書と

松本 米子

鎌倉喜久恵

森 理和

森 理和

田中 藤穂

竹内 弘子

赤座 典子

新そばや古き暖簾を潜りけり  
 新蕎麦や風を伴ふ通り雨  
 新蕎麦や外人さんがたべてはる  
 新蕎麦やゆつくり話す人になり  
 新蕎麦やあかい湯桶の折鶴めく  
 新蕎麦を食せり古き学生街  
 練り込んで伸して新蕎麦鄙の村  
 新蕎麦や薬味不要と戴ける  
 予約して新蕎麦の客賑やかに  
 新蕎麦や雨降る村を訪ねたり  
 走り蕎麦汁は田舎のだしの味  
 十人ほど相席となる走り蕎麦  
 茹汁の白くにござる走り蕎麦  
 鯖節の目簀にかわく走り蕎麦  
 良く嚼んで芳しきかな走り蕎麦  
 走り蕎麦宿の主がごゆるりと  
 しもたや風の二階に上る走り蕎麦

森山のりこ  
 長崎 桂子  
 定梶じょう  
 赤座 典子  
 竹内 弘子  
 大日向幸江  
 大日向幸江  
 長崎 桂子  
 須賀 敏子  
 大日向幸江  
 鎌倉喜久恵  
 竹内 弘子  
 竹内 弘子  
 竹内 弘子  
 森 理和  
 鎌倉喜久恵  
 竹内 弘子

信濃への旅一つには走り蕎麦  
 しもたや風の二階に上る走り蕎麦  
 走り蕎麦通のふりして十割を  
 一滴も吞まずに出でし走り蕎麦  
 「きぬかつぎ」 とはなんと雅な命名なのだらう。この  
 名前でついつい箸が伸びる。  
 母恋ふや剥きてぬくとき衣被  
 衣被あましょ稿にせかされつ  
 茹で上げて芋名月の衣被  
 白ふきん掛け大笹の衣被  
 衣被世の少子化をとどめたし  
 少子化の世とも思はず衣被  
 衣被珍な稚児僧突如出で  
 秋刀魚が不漁続きたつたが今年はうれしいことに豊漁  
 と聞く。庶民の魚に戻った。秋刀魚一尾百円だが大根は  
 一本二百円であつた。  
 辛口の酒ゆつくりと初さんま  
 気仙沼秋刀魚の口の黄色くて  
 赤座 典子  
 須賀 敏子  
 赤座 典子  
 須賀 敏子  
 田中 藤穂  
 定梶じょう  
 木村茂登子  
 田中 藤穂  
 田中 藤穂  
 赤座 典子  
 井上 石動



少年来てポツリと秋刀魚食ひたしと  
 民宿の秋刀魚の刺身大皿に  
 さんまさんまそが上に振る赤穂塩  
 唱へつつ顔の短き秋刀魚焼く  
 久に逢ふ吾子と夕餉の秋刀魚焼く  
 さんま嫌ひの妻とも長き縁なる  
 居酒屋の秋刀魚いつびき紐育  
 盆の月兎さんまだ居れますか  
 初秋刀魚鮓屋の背の丸くなり  
 軒低く古りし居酒屋秋刀魚鮓  
 横一文字に秋刀魚焼上がる  
 煙ほどさんま焼けてはをらざりし  
 秋刀魚焼く子供の頃は炭だった  
 さんまさんま宮古のさんま流石なり  
 女子会や意見の多き初さんま  
 女子会や意見の多き初さんま  
 秋刀魚には石垣の塩ひとつまみ  
 サンクスで秋刀魚は買はず7でも

鎌倉喜久恵  
 芝 尚子  
 芝 尚子  
 赤座 典子  
 芝宮須磨子  
 堀内 一郎  
 堀内 一郎  
 長崎 桂子  
 赤座 典子  
 森 理和  
 竹内 弘子  
 芝 尚子  
 鎌倉喜久恵  
 赤座 典子  
 赤座 典子  
 赤座 典子  
 赤座 典子  
 須賀 敏子  
 佐藤 竹僊

古里は秋刀魚は干物で食べる物  
 黄昏るるカレーの匂と秋刀魚の香  
 折鶴を折ったその手で秋刀魚焼く  
 抵抗の一票投じ秋刀魚買ふ  
 煙り出ず秋刀魚の香ばやけけり  
 軋轢と読みもむづかし秋刀魚焼く  
 秋刀魚焼く薄き煙の懐かしき  
 秋刀魚焼く今年の秋刀魚痩せてゐる  
 味薄く目黒の秋刀魚恋しかり  
 秋刀魚だよ十円だつて早く来て  
 腸くらふ秋刀魚高値の苦味かな  
 原發ですることといへば秋刀魚焼く  
 隣より声のかかりて初秋刀魚  
 大日向幸江  
 大日向幸江  
 大日向幸江  
 田中 藤穂  
 秋川 泉  
 赤座 典子  
 大日向幸江  
 田中 藤穂  
 秋川 泉  
 赤座 典子  
 七郎衛門吉保  
 秋川 泉  
 七郎衛門吉保  
 佐藤 竹僊  
 須賀 敏子  
 (佐藤喜孝記)

あとがき

今月の表紙

千代田区富士見の東京大神宮に「かけ乾し」されている稲穂です。例年九月ごろに神職と巫女が神社近くの水田で稲穂を刈り取り、境内で天日干しにしています。稲穂は、秋季大祭や新嘗祭にお供えされて、一年の豊作を神に感謝します。（撮影・不寝）



発行日

八月号の発行日が八月五日。さあ追いつくと期待に胸が膨らんだ。好事魔多し。パソコンが壊れ、バックアップファイルがなぜか消え、復活するのに大分時間を使った。また一からやり直しである。使ひやすくするためにはまだまだ時間がかかる。Windows 10から11にしかただけでシャットアウトするのにもつろつろする始末。なぜかうも仕様を変えるのだらう。変たからといって特段便利になつた訳ではないのに。（喜孝）

二〇二五年九月号

発行日 九月二十三日  
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話 090 9828 4244 サンハイツ石神井2 一階

印刷・製本・レイアウト カット／福井美佐子・ティリ エイマ 竹僊房

会費 一五〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）